

## 祖母の家までの道

北海道教育大学附属旭川中学校 三年 横山 和南

祖母の家は、自宅から車で片道一時間程の山中の集落にあります。移動の一時間は小旅行の気分です。車内で聞く好きなCDを選び、道中用に買ったお菓子を袋に詰め、昼寝用の膝掛けを持って助手席に座ります。

旭川を出て、神居古潭に入ると、周りに民家は無く、道の両側は山、石狩川も流れていて、大自然の景色に一気に日常から開放されたのびのびとした気持ちになります。

車の窓から、春は道路脇の桜でお花見をして、秋は色鮮やかな紅葉が楽しめます。冬も、車のスピードで向って降る綿雪が左右に流れるのを見るのも面白いのです。ただ、夏の夜は湿気と暑さが怪談話を頭に思い浮かべてしまい、長い春志内トンネルを通るのは恐ろしく、苦手です。

深川に入ると、祖母宅の仏壇への供物を何にしようか、という話になります。道脇には農家さんの直売所が点々とあり、さくらんぼやとうきび、プルーン、りんご、夏から秋には旬の美味しい果物が買えます。供物と言いながら、祖母と私の好きな物をお土産にします。祖母の喜ぶ顔を想うと、会うのがもっと楽しみになります。

更に四十分程走り、国道から脇道に入ると蛇の様に曲がりくねった細い道を抜けて、祖母の家のある集落です。山と山の間の細長い土地に建つ家々、激しく雨の降る日は、両側の山が崩れて埋まってしまうのではないか、山から大水が来て、車も家も流されてしまうのではないかと恐くなる時もあります。

祖母の家が近づくと、家の中から見ていたのだろう祖母が、車が止まると同時に、それよりも速く家から出て来ます。祖母は

「良く来たねえ。」

と、元気に笑う日と、

「随分遅かったねえ。待ちくたびれたわ。」

と、母に対して怒る日と二通りがあります。

でも、私にはいつも同じで、

「待ってたよ。早く中に入りなさい。」

と、笑って背中をさすります。母には厳しかったという祖母も、私には無条件に優しく、母も祖母宅で私を叱ると、祖父母から強烈な反撃に遭うので、小言を控えます。ここは、私にとって心身共にリラックスできる最高のオアシスでした。

それが今、コロナの為に何もかも変わってしまいました。

二月末、私が修学旅行に行っていた間に、北海道ではコロナの患者が増えていて、修学旅行の後、学校は休校、祖母にお土産を直接持って行く事はできませんでした。送ったお土産のお礼に電話をくれた祖母は、明るく元気な様子でした。

「コロナが終わったら、又遊びにおいで」

祖母とは、その後もずっと会えず、時々電話で話をしました。

八月、祖母に肺がんが見つかりました。コロナを心配して、安全の為に祖母に会わない様にしていた事で、祖母の病の発見が遅れてしまったのではないかと、と叔母と母は自分達を責めています。コロナの為、入院中は祖母に会えなくなるので、その前に祖母に会いに行きました。会うと言っても、窓越しにです。

祖母の家に車が止まっても、祖母は出て来ません。マスクをして、庭から裏に回り、居間の窓ガラスをコンコンと叩きました。少しして顔を見せた祖母は、別人の様に暗い表情で、青白くやつれて見えました。私も母も、言葉が出て来ません。祖母が、かすれ声で、

「ばあちゃん頑張るから。頑張るからね。」

と、言いました。母は、うんうんと頷いて、私は固まって立っていました。手を振って、車に戻りました。マスクのお陰で泣いた顔を祖母に見せずに良かった、と思いました。

帰りの車の中で、二人で声を上げて泣きました。祖母のがんは、とても進行しています。

この先、二度と楽しい気持ちで、この道を走る事はないのだと思います。